

平成二十八年読書感想文コンクール作品集

もろへ

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

目次

講評にかえて

入選 第1位 『山月記』を読んで

入選 第2位 『世界から猫が消えたなら』を読んで

入選 第3位 『君の臍臓をたべたい』を読んで

佳作 『おじいさんのランプ』を読んで

〃 『いのちをいただく』を読んで

〃 『カエルの楽園』を読んで

〃 『君の臍臓をたべたい』を読んで

〃 『少女』を読んで

〃 『心を整える。』を読んで

〃 脳を若々しく保つ

― 『「ほら、あれだよ、あれ」がなくなる本
物忘れしない脳の作り方』を読んで―

編集後記

図書館長

一般科目・国語科教員

山田 繁伸 …… 1

機械工学科 三年 野上 達平 …… 2

情報工学科 一年 岸本 うらら …… 3

都市・環境工学科 三年 田 渕 愛佳 …… 4

機械工学科 二年 野 田 琉人 …… 5

都市・環境工学科 二年 竹 田 はるか …… 6

機械工学科 三年 首 藤 聖人 …… 8

電気電子工学科 三年 梅 本 恭平 …… 9

都市・環境工学科 三年 日 名 子 唯 …… 10

都市・環境工学科 三年 村 上 彩音 …… 11

電気電子工学科 四年 平 野 音 瑠 …… 13

学生図書委員長

(機械工学科四年)

高 橋 雄 文 …… 14

平成二十八年度
校内読書感想文コンクール

講評にかえて

図書館長
一般科目・国語科教員

山田繁伸

第一次審査から第三次審査までを経て入選十作品が選出された。私の関係した第一次審査では、二年生一二六人、三年生一三〇人の作品が集まった。提出率は、二年生、三年生ともに七十八・八%であった。多くの学生が読書感想文を書いて提出したことになる。書いたと言うことは、本を読んだと言うことだ。しかも、今年度は、四年生の参加があつた。高学年生は、普段から読書していると思うが、読書感想文を書くところまでいっていないだけだと思う。それが、今回は数編の投稿があつた。入選には漏れたが、原稿用紙八枚の力作もあつた。素晴らしいことである。次年度以降も高学年生の参加を期待する。

読書感想文を書くには、小説であろうが、随筆・評論であろうが、その本の内容をしっかりと読み取らなければならない。つまり、読解力を

必要とする。更には、解釈・鑑賞しなければならない。その後初めて、自分の感想・意見が持てる。一連の流れではどう解釈するかが一番大切で、読解力によって感想文が違ってくるのではなからうか。「行間を読む」とか、「顕彰隠密^{けんしょうおんみつ}」とか言う言葉がある。それらは、表現にはつきり現れていることだけではなく、その裏に隠されている著者の真意を汲み取る必要性を説いている。入選作品は、作者の意図するものをしっかり読み取り、自分なりの解釈を書き表していた。

第一位の『山月記』は、高校の教科書にも採録される作品である。友情の視点から読み解き、それを人間の本質と絡めたところに新鮮さを感じられた。短編小説であるから可能と言えれば可能なのだが、作者は「繰り返し読むうちに」と書いている。同じ道を朝夕散歩しても新しい発見はある。それと同じように、何度も読み直すことによって、新たに気付くことも多い。

第二位の『世界から猫が消えたなら』は、ラジオドラマ、映画、漫画にもなつたらしい。「読書」感想文だから、作者は本を読んで書いたのであろう。しかし、読書になじめない人は、本より先に映像をみることもよいのではないかと思う。脳腫瘍を宣告された主人公の残された時間の中の行動を読み解く。「ない」ことからしか、「ある」ことの大切さは分からないと指摘している。

第三位の『君の睥睨をたべたい』、こちらも厳しい状況にある人物が、主人公の一人だ。しかも余命を全うする前に通り魔事件で亡くなってしまう。しかし、もう一人の主人公との関係において大きな存在として残ってゆく。「選択」と言うキーワードで作者は読み解いている。人によっては「選択」に対して反対するかも知れない。しかし、読書感想文の重要なことは、読んだ自分がどう領解したかの一点である。

他の入選作品、また入選に漏れた作品も自分なりの感想・意見が書かれていたと思う。特に「命」や「人生」あるいは「人間の本質」に迫る感想が多かつたと思う。「命」は科学でいくら分析しても分からないかも知れない。我が子に流す親の涙は、塩分濃度をいくら測定しても分からないのではないだろうか。読書には総合的・直感的に物事を捉えさせてくれる効用がある。

また、他人の感想を読んだり聞いたりすることとは、自分の感想を深化させることにも役立つ。もちろんあまり親しくない人に本の話をするのも嫌いされるだろう。しかし、気が置けない友達と本について話すのは楽しい。本を読まなくても生活には困らない時代だが、読めば読んだでまた違った豊かさにつながるだろう。

第1位

『山月記』を読んで

機械工学科 三年

野上達平

本当の『友情』とはなんだろうか。中島敦の作品『山月記』を読み終えた後に頭に浮かんだのはこんな疑問だ。この作品を読もうと思ったきっかけは、授業で同じ作者の『名人伝』という作品を読み、中島敦の作品に興味を持ったからである。『山月記』は、中国の唐の時代が舞台の作品で、自らの境遇に不満と焦りを感じた李徴が虎へと変化してしまい、その虎のいる山林に入った李徴の古い友人である袁修との邂逅を通して、李徴が自身のおごりや傲慢な性格を見つめ直す物語である。

この物語は、袁修が李徴の話を静かに聞くように話が進んでいくが、私自身、そこまで他人の話を丁寧に聞いているとは胸を張って言うことができないことに気付いた。せわしく相づちを打つわけではなく、結論を急かさすわけでもない、「相手が満足するまで話を聞く」という姿勢が、袁修が李徴との仲を深めた一つの要因ではないだろうか。「話し上手は聞き上手」とよく言われるがそれになぞらえて言えば、袁修は「話さない聞き上手」といったところだろうか。

本当の『友情』とは、相手を肯定することではないだろうか。この作品で李徴は過去の自分を自嘲気味に話すが、それを袁修は無闇に否定するのではなく、全て肯定し受け止めた上で彼を見放さなかった。その姿こそが、お互いに刺激を与えることのできる仲ではないだろうか。

この物語の中で、李徴と袁修は互いを「故人」と呼ぶ。辞書で「故人」を調べてみると、一般的に用いられる「亡くなった人」という意味とは別に、「古くからの友人、旧知」という意味もあるようだ。作中におけるこの言葉はこちらの意味で用いられたものだろう。

長く親交を深め、互いが「故人」と呼べるようになるためには、相手を肯定し、理解するところこそ重要であると、この作品は説いていると感じた。

また、繰り返し読むうちにもう一つのテーマを感じた。それは、『人間の本质』だ。

虎になった李徴がかつて人間であったころの自分を回想した場面で印象に残っている語句がある。それは、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」の二つである。「臆病な自尊心」とは、自分が優れていると優越感を感じつつも、本当は違うかもしれないと恐れて挑戦しないことであり、「尊大な羞恥心」とは、他人との関わりを避けて自らの世界に浸ろうとする心である。この語句を読んだとき、私はハッとされた。私の

これまでの生活の中で思い当たる出来事がいくつもあったからだ。特に中学生だった頃は、成績が良いというだけで自分の力を過信し、周りに頼らず自分だけでしようとしたことがいくつもあった。そのほとんどが上手くいかなかったのはいうまでもない。

人は誰しもこの「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」を持っていると思う。自分が人よりも優れていた、でも実際は他人よりも劣っていたらどうしようという気持ちや、自分の考え方が一番良いと信じ、他の意見や考えに耳を貸さないということを経験している人は多いのではないだろうか。そんな誰もが持っている心の弱さ、人の醜い部分をこの二つの言葉は表現していると感じた。

作中に「人生は何事をも為さぬにはあまりに長いが、何事かを為すにはあまりに短い」という一文がある。自身の心の弱さに負け、何もせずに時間を空費するのは結局のところは、空虚で、あとに残るものは何もない。何事かを一人で成し遂げるには短すぎるというのであれば、「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」に負けず、自分を切磋琢磨することのできる仲間をつくり、高めあっていけば良いのではないだろうか。そうしてお互いに刺激をシェアしていくうちに、本音で語り合い、互いを受け入れ肯定しあえる「故人」のような仲になることができると私は思う。

人が虎に変化するという非日常な物語である
うえ、漢文調で書かれているため難解な言い回
しや漢字が多いが、だからこそ「人間の心の弱
さとそれを克服する友との関係」という大きな
テーマがはっきりと伝わり、考えさせられる作
品だった。



第2位

『世界から猫が消えたなら』 を読んで

情報工学科 一年

岸 本 うらら

もし自分がもうすぐ死んでしまうと知ったな
ら、私はなにをするのだろうか。

郵便配達員として働く三十歳で映画が好きな
主人公。猫とふたり暮らし。そんな主人公があ
る日突然、脳腫瘍で余命わずかであることを宣
告される。絶望的な気分家で家に帰ってくる、
自分と全く同じ姿をした男が待っていた。その

男は自分が悪魔だといい、「この世界から何か
を消す。その代わりにあなたは一日だけ命を得
る」という奇妙な取引を持ちかけてきた。主人
公は生きるために、消すことを決めた。電話、
映画、時計……主人公の命と引き換えに、世界
からモノが消えていく。主人公は寿命のために
何かを消す。悪魔は、消す前に一度だけそれに
触れてよいという。主人公は誰かに電話をし
たり映画のビデオを借りに行ったりする。そこ
で主人公はそれについての記憶を思い出す。それ
は彼の胸を締め付ける。今まで生きてきて、ど
うしてそれを大事にしてこなかったのか。そこ
から、「生きることとは何か？」そんな主人公
からのメッセージのように感じた。

この小説のすごいところは、読んだ人がほと
んど全員「自分は、何が消えるくらいだったら
死ぬのだろうか」と考えてしまうことである。
私もこの本を読んだ後、このようなことを考え
てしまった。この答えが出てくるのは随分後の
ことだろうと私は思う。フィクションの設定の
中、リアルな面を感じさせられた。だからこそ、
フィクションの世界の話に終わらずに現実的に
「もし〜が世界から消えたら……」とおもわず
考えてしまう作品になったのだと思う。

さらに、私がこの作品を読んで感じたことは、
何かの大切さはそれが「ある」ということから
ではなく、それが「ない」ことからしか理解す
ることができないということだ。何かの大切さ

は、何かを失うことでしか気づくことができな
い。でも、それが欠けた世界を前もって想像す
ることもできると思う。そうやって、何かを大
切であると前もって気づくことで、その喪失を
避けるための手段だとか、なくなったあとの行
動を考えることができる。「いつも通り」とい
う状態は普段あまり自覚されないが、とても危
ういものだ。急に誰かがいなくなるかもしれな
いし、危機が侵入してくるかもしれない。自分
が明日死ぬかもしれない。だからこそ、今日と
いう日を後悔しないように、未来の自分をそん
な世界に生きることがないように、毎日手を抜
かずさまざまな選択をしていかなければなら
ないのだと私は思った。



第3位

『君の臍臓をたべたい』 を読んで

都市・環境工学科 三年

田 淵 愛 佳

題名だけだと何やら猟奇的な話を想像してしまふこの本を、私がなぜ手に取ろうと思ったのか。その理由は、この本の発する不思議な雰囲気にあった。

一面に広がる満開の桜と、微笑んで遠くの景色を眺める少女、そして少し距離を置いて本を読む少年の後ろ姿。そんな少し儂げな絵に『君の臍臓をたべたい』という題名の書かれた表紙は、店頭に並ぶ数多くの本の中でも一際目を引いた。そしてこれが、今までに読んだどの本よりも私の心を揺さぶる、純粹で美しい物語との出会いだった。

高校生の主人公は、たまたま訪れていた病院で、人気者のクラスメイト・山内桜良の日記「共病文庫」を拾い、彼女が重い臍臓の病によって余命が残り一年であることを知ってしまった。これをきっかけに桜良は、自分の秘密を唯一知る彼を自分の「死ぬまでのやりたいこと」に巻き込んでいき、二人は同じ時間を過ごすようになる。

物語は終始、主人公の目線で進んでいく。病気とは思えないほど快活でよく喋る桜良と、友人を作らず常に一人の主人公。まるで正反対の二人によって紡がれていく冗談交じりの軽快な会話によって、読み始めてすぐこの物語へと引き込まれた。そして主人公と同じく、自らの病と残された時間に真っ直ぐ向き合う桜良という人間に、強く惹かれていった。

「生きるっていうのはね、きつと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ」

主人公が「君にとって、生きるというのはどういうこと？」と聞いた時、桜良はこう答えた。誰かを好きになる、嫌いになる、手を繋ぐ、すれ違う。自分一人では自分があるってわからない。人と私の関係が、私が生きているということ。そんな彼女の飾らない言葉が、私の心へまっすぐに伝わった。日常の中で、人と関わるなんて当たり前前（まへ）の事を気に留めた事などなかった。しかしその気にも留めない事が、私が私としてここに存在している、生きているという事なのだ、彼女に気付かされた。

先ほど私は「日常の中で、人と関わるなんて当たり前前（まへ）の事」と言ったが、殆ど（ほとん）どの人間がそう言うだろう。当たり前前に人と関わり、日々を生きている。けれどももしかしたら明日、事故に遭って死ぬかもしれない。そんな可能性が、今「当たり前前に」生きている全ての人にあるのだ。

私にも、幼い子供にも、余命一年の少女にも平等に。桜良は、余命を全うする前に通り魔に刺され、亡くなった。予想できるはずもない展開に衝撃は大きく、私は思わず本を閉じてしまった。主人公も私も忘れていた。死は突然襲ってくることで、どんな人間にも明日は約束されていないことを。私は死というものを、改めて近くに感じた。

桜良の葬式から数日後、主人公は彼女の家を訪れる。そこで桜良の秘密を知るきっかけとなった「共病文庫」を受け取り、彼と過ごした時間に対し、彼女がどう思っていたのかを知ることになる。

「周りがいなくても、一人の人間として生きる君に、私は憧れていた。君は人との関わりじゃなくて、自分を見つめて魅力を作り出した。私も、自分だけの魅力を持ちたかった」

「共病文庫」の中の、主人公に宛てた言葉だ。主人公が彼女の生き方に惹かれたように、彼女もまた彼の生き方に惹かれていた。まるで正反対な二人は、ずっとお互いを見ていたのだ。恋や友情、そんなありふれた言葉で表わすのはもつたいないほど純粹な二人の関係に、私は涙が止まらなかつた。「君の臍臓をたべたい」という言葉は、「爪の垢を煎じて飲む」ということわざのように、君のような人になりたい、そんな思いが込められた、この物語に相応しい題名だった。

「自分で選んで、君に出会ったの」

桜良は、出会いや出来事は偶然ではなく選択だと言った。運命や神の導きという考え方もあるけれど、全ては選択してきた結果なのだ。桜良が「共病文庫」を書いたのも、主人公が「共病文庫」を拾ったのも、偶然ではなく、二人は自分で選んで出会ったのだ。そう考えると、私のこれまでの人生の中の出来事や出会いが、とても価値あるものに見える。人生は選択の連続であるというが、本当にその通りだと思う。

私がこの本に出会ったのも私の選択だ。この物語に、人と関わるというのは私が存在する証なのだという事、死は身近なものである事、私達は選択して生きていくという事、そんな自然だが意識していない大切な事を思い出させられた。私はこの本を沢山の人に読んで欲しい。劇的に人生が変わるようなことはないけれど、日々の小さな幸せや、自分の人生の価値を感じられるようになるだろう。



佳作

『おじいさんのランプ』 を読んで

機械工学科 二年

野田 琉人

新美南吉といえば、小学校の頃に『ごん狐』や『手袋を買いに』を読んだことがあります。童話でありながら複雑なメッセージが含まれていて、読み終わった後には幼心に深く考えさせられたことをおぼえています。

この『おじいさんのランプ』はその二作品よりも少し対象年齢が上だという印象を受けました。

東一のおじいさんである巳之助が十三だった頃から物語は始まります。身寄りがなかったためさまざまな手伝いをしながら稼ぎ暮らしてきた彼は、ある時人力車曳きを頼まれ、初めて自分の村から出て隣の町にきました。そこで彼はガラスのランプを目にします。彼の村ではまだ夜はほとんど暗いままで、少し贅沢な家で行灯あんどんがあるぐらいでした。夜でも煌々と町を照らすランプに巳之助は「文明開化」を感じて、とても感動しました。巳之助はそのランプを使い商売をはじめることになりました。巳之助の熱心な気持ちと結び、ランプ売りの商売は成功し、

その商売で生活していけるようになります。巳之助はやがて家庭を持ち、やっとひとり立ちをしたという満足を得るようになりました。

しかし、あるとき村に電気が通ることになったのです。ランプ売りの商売に思い入れが強い巳之助はショックを受け、電灯を激しく非難したり、お世話になっていた区長さんを恨んだりしました。その思いは激しくなり、ついに区長さんの家に火をつけようとまでします。そのとき、巳之助はマッチが見つからなかったために、古い火打道具を使って火をつけようとしますが、なかなかつきません。その時、巳之助は古いランプに固執し、新しい物を受け入れない自分の愚かさを思い知るのでした。

巳之助は家にあるランプを全て池のふちの木に吊し、石ころをぶつけて壊そうとしますが、三個目のランプを割った後、涙でそれ以上割ることはできなくなりました。それから彼はランプ商売をやめて、本屋になったのでした。

私は、おじいさんの最後の言葉がとても素晴らしいな、と感じました。

「わしの言いたいのはこうさ、日本が進んで、自分の古い商売がお役に立たなくなったら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古い商売にかじりついていたり、世の中の進んだことをうらんだり、そんな意地のねえことは決してしないことだ」

今の世界では、産業や技術がどんどん発展し

ています。今日も、明日にも、新しいものがどんどん作り出されていきます。私たちは「新しいもの」の発展に触れて行く上で、古いものにとらわれずに、先へ先へと目を向けることが重要なかもしれません。これからもっともっと時代は先へ進むペースが速くなっていくでしょう。戸惑ったり、理不尽だと思ったりすることも出てくると思います。けれど自分勝手な理由で進歩をねたんだりせず、世の中のためになることを行える立派な人間になりたいと思いました。

でも、おじいさんの考え方も今の時代ではもう時代遅れになっているのだろう、とも思いました。

今では、時代は新しいものに向けて進むだけではなくなっています。古いものが再注目されているのです。たとえば電灯が世界中で光るようになったとしても、ランプの暖かな光や、行灯のほのかな光に代わることはできないと言われるでしょう。逆に「懐かしい」とか「自然だ」とかの理由でそれらが大切にされることもあるでしょう。ランプを割って古い商売への固執にはじめをつけたおじいさんは偉いと思います。でも、電灯が光っているなかでランプ売りを続けた人達も偉くないがありません。

昔の農家の人は、この小説に書いてある通り新しいものを受け入れられなかったのでしょうか。けれど今の時代はどんどん新しいものが開発さ

れ、みんながそれを求めていく時代です。もちろん今でも新しいものを苦手とする人もいますが、その人たちの気持ちも一つの正解ではないでしょうか。新しいもの、いいものとは限らないし、古いもの、悪いものとも限りません。それぞれのいいところは必ずあります。

おじいさんのやったことはとても気風があつて素晴らしいし、私にはとても真似できません。ですが、自分の商売に固執して他人に迷惑をかけるのは、決していいことではありません。けれど世の中の流れに流されずに、古いやり方を守ることも大切なことではないでしょうか。

人間には、古いものから新しいものを作り出し、また古いものと新しいものを合致させてより良いものを作り出してきた歴史があるのですから。



佳作
『いのちをいただく』
を読んで

都市・環境工学科 二年

竹田 はるか

いのちを「解く」という言葉を私は初めて知りました。これは、食肉解体業に携わる人々が「牛や豚を殺す」という意味で実際に使っている言葉です。

この『いのちをいただく』という本は、食肉センターに勤めて実際に命を解くことを仕事にされている坂本義喜さんという方の話です。

牛の命を解いてお肉にする。坂本さんはこの仕事がずっと嫌でした。世の中の人々にとって大切な仕事だということは分かっていますが、牛と目が合うたびに仕事が嫌になるのです。心はどこかに、いつか辞めたい、という思いを抱いていました。

ある時、こんな坂本さんの気持ちを変える出来事があったのです。

坂本さんには小学校三年生の息子がいました。その子は、お父さんの仕事である食肉解体の仕事をかっこ悪いと思っていました。しかし、その仕事の大切さについて教えてくれた先生の言葉を受け、お父さんの仕事の偉大さを理解して

いきます。

息子の理解に励まされ、仕事を続けようと決意したある日、坂本さんの目の前に現れたのは一頭の牛と女の子でした。

「みいちゃん、ごめんねえ」

謝り続けながらみいちゃんという牛のお腹をさする女の子。生まれた時から一緒に育ってきた牛との別れを悲しむ姿に、気持ち揺らぐ坂本さんは、次の日の解体の仕事を休むと息子に打ち明けます。そんな坂本さんに

「心の無か人がしたら、牛が苦しむけん。お父さんがしてやんなっせ」と息子が後押しします。

次の日、坂本さんはその牛のいのちを安らかに解きました。牛はすべてを分かっていたかのように、暴れることなく涙をためて坂本さんにいのちを託しました。

後日、牛の飼い主がやってきて、坂本さんに話してくれました。最初はみいちゃんがかわいそうだから、もらって帰ったみいちゃんの肉は絶対に食べないと言っていた孫の女の子でしたが、「みいちゃんのおかげでみんなが暮らせるぞ。食べてやれ。みいちゃんにありがとうと言うて食べてやんなっせ」

と話すと、女の子は泣きながら

「みいちゃん、いただきます。おいしかあ、おいしかあ」

と言つて食べたそうです。

坂本さんは、もう少しこの仕事を続けようと思いました。

この本を読んで、私たちは毎日たくさんの「いのち」をいただいているのだと、改めて考えさせられました。

私たちの暮らすこの日本は、食品廃棄量が世界一、二位を争うほど高く、年間二七〇〇万トン出しているといえます。これは、世界の七千万人が一年間食べていける量だそうです。そのうち、まだ食べられるのに捨ててしまうもの、いわゆる「食品ロス」が五〇〇万トン〜九〇〇万トンもあるといわれています。このような実態を受け、コンビニ業界などでの消費期限の見直しや、「フードバンク」という社会福祉活動も行われるようになっていきます。

これらすべての食べ物は、「いのち」です。肉も魚も野菜も米も、すべてが種を残そうとする生命体なのです。人が生きるということは「いのち」をいただくということ。殺すということ。私たちのいのちは、多くのいのちに支えられているのです。だから、食事の際には「いただきます」と言うのです。それを実感したときに、食べ物のありがたみが分かります。食べ物に感謝するべきであり、食べ物を粗末にしてはならないと分かるのです。

また、たくさんのいのちをいただいて生きている私たちそのものも、それぞれが大切なひと

つの「いのち」です。

中学生の時、「いのちのおもさ」という講演会を聞いたことがあります。助産師の光武智美さんと羊毛フェルト作家の小林尚美さんのお話でした。その中で、自分がここにいることは天文学的確率の奇跡であるという話を聞き、いのちの尊さを認識しました。私たちはそれぞれがかげがえのない「いのち」なのです。

周りにいるたくさんの人々の温かい支えや、毎日いただく多くの「いのち」のおかげで、今のわたしたちはあるのだ、ということをお忘れず、自分らしく、これからも生きていこうと思えます。



佳作

『カエルの楽園』を読んで

機械工学科 三年

首藤聖人

私はタイトルを見たときの衝撃と各ページの読みやすさに惹かれてこの本を選んだ。この本の作者は『海賊とよばれた男』や『永遠の0』などを著したことで知られる、百田尚樹さんで、この本では百田さん独自の考え方が展開されている。

物語の舞台は「カエルの国」。平和に暮らしていたアマガエルたちの国に、突如、凶悪なダルマガエルたちが現れるところから始まる。同じ「カエル」でも、ダルマガエルたちはアマガエルたちよりも一回りも体が大きく、仲間のアマガエルたちをどんどん食べてしまう。そんな状況に耐えかねたアマガエルたちは、現状を変えるために立ち上がり、六十匹のアマガエルたちが安住の地を求めて旅に出た。しかしながらすぐには安住の地は見つからず、旅は過酷なものになる。旅の途中では、ヘビやイワナ、イタチといった天敵から仲間が襲われ、次々にアマガエルの数が減っていく。住み心地の良さそうな池や沼を見つけても、そこにはすでに他のカエルたちが住んでいて、彼らもまた、体の小さ

なアマガエルたちを食べようとする。生き残った二匹のアマガエル「ソクラテス」と「ロベルト」が諦めかけていたそのとき、ツチガエルたちの国「ナパージュ」に辿り着く――。

この本は、カエルたちが中心的に描かれた寓話である。人間ではない他の生き物が中心的に描かれていて、読み手の興味をわきたたせ、物語の最初から最後まですぐに読み終えることができる。また、登場人物にも読み手の興味をわきたたせる要因があると思う。例えば文中に出てくるツチガエルたちは私たち「日本人」をあらわしていて、ダルマガエルたちは「中国人」をあらわしている。これは、ツチガエルたちの住む国「ナパージュ」が「Japan」をひっくり返して読んでいることからわかる。さらに、物語の中盤になると、ナパージュの周辺を警備する年老いた鷲「スチームボード」が出てくるがこれは「アメリカ人」にあてはまる。他にも百田さん自身と思われる「嫌われ者のハンドレッド」や「SEALDS」をモチーフにしたと思われる「フラワーズ」という団体まで出てくる。もう気がついた方がいると思うが、この本は憲法第九条をめぐる日本社会の様子を風刺した本になっていて、「憲法第九条を守れば永遠に戦争は起きない」とか、「憲法第九条があるから日本は国外から戦争に巻き込まれることはない」という人たちに對して問いかけるような内容になっている。例えば、ナパージュのツチガ

エル達が守っている「三戒」の内容に對してソクラテスたちが問いかける場面がある。この場面の最後では、「ツチガエルであろうとカエルであることに違いない。争いは争いを生むだけであり、我々が優しく接することで相手も必ず優しくしてくれる。争うための力をもつから相手も力をもつ。だから我々は力を捨て、三戒を守っているのです」とナパージュのカエルが語っている。確かにツチガエルの意見は間違っていない。争うための力がなければ争いは起らないだろう。しかし、もし相手が力をもっていて、自分が力をもっていなければどうなるだろうか。間違いない力をもつ側は力をもっていない側を攻撃するだろう。たとえ、攻撃しなかったとしても力を利用して、相手を脅したりするだろう。作者である百田さんは、今の日本社会の現状に耐えかねてこの本を書いたのだろう。自民党が提案している「安全保障法案」はツチガエルたちと反対の考えだ。たしかに、現在の日本が平和なのは憲法第九条があったからかもしれないし、そうでないかもしれない。もしも、近隣の国が日本に攻め込んできたら、きっと日本は何もできずに降参してしまうだろう。だからといって、争いのための力をもつことは許されない。私たちは今、ジレンマのようなものに苦しめられている。今のままでいいとしても危険だということは理解できるが、争い合うことで人が死ぬことは絶対にあつてはなら

ない。話し合いで解決することは不可能なのか。これからの日本についてとても深く考えさせられる一冊だった。



佳作

『君の臍臓をたべたい』 を読んで

電気電子工学科 三年

梅本恭平

『君の臍臓をたべたい』このタイトルを見た瞬間、私は変なタイトルの本だと思った。しかし、それと同時になぜこのタイトルなんだろうと興味を湧いた。そして何よりその表紙の絵が気に入った。

買って読み始めてみると、主人公は自分以外の人に興味のない僕と、ヒロインで臍臓の病気で余命幾許もないクラスの人気者の山内桜良という二人の高校生。

ある日、僕は盲腸の手術後の抜糸のために病院に来ていた。病院のロビーの隅のソファに一冊の文庫本が置かれていた。大の小説好きでもあった僕はそれが気になり手に取った。

「共病文庫」

そう手書きで書かれた本の中にはボールペンで私は臍臓の病気でまもなく死ぬという趣旨のことが書かれていた。僕が呆気にとられていると、山内桜良が慌ててそれを取り戻しにやってきた。これが僕と彼女との出会いである。

【地味なクラスメイト】くん共病文庫を見られた桜良は【地味なクラスメイト】の僕だけに自分の病気を告げた。この出来事以来、彼らは親密な関係になっていく。

私は「友だち」でも「恋人」でもない、しかし「友達以上恋人未満」では片付けられない微妙な関係の二人の青春（或いは死に際）の様子を通して、

「生きる」

とはどういうことか。そして、

「すべての命は平等である」

ということを知ったつもりで実はわかっていなかったことに気付かされた。

二人は病院で出会って以来、二人で焼き肉へ行ったり、親には内緒で「豚骨ラーメンの美味しい県」へ旅行に行ったり、学校でも話したり、一緒に帰ったりします。すべては強引な桜良によって計画されたものであった。なぜそんなこ

とをするかといえば、真実と現実だけを突き付けてくる医者や、必死に日常を取り繕おうとする家族、病気だと知ったら感傷的になってしまう彼女の友達でもない、病気と知った上で、普通に接してくれる【秘密を知っているクラスメイト】くんに対して、なんとも明確に言い表わすことのできない特別な感情を抱いていたのだろう。

また、彼女がそんなことを思っていると同時に、人間味のなかった、他人に興味のなかった僕にも、少しだけ、彼女と話したり、出かけたりにすることが、楽しいと感じるようになる。彼もまた桜良に対して何か特別な感情を抱いていたのだと思う。そんな中、ある日、桜良は体調を崩し、病院に入院してしまう。そのとき僕が桜良にある質問をする。僕は、「君にとって、『生きる』ってどういうこと」と彼女に聞いた。それに対する彼女の回答がとても心に残っている。彼女は、

「生きるっていうのはね、きつと誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって呼ぶんだよ。……中略……自分たった一人じゃ、自分がいるってわからない。誰かを好きなのに誰かを嫌いな私、……中略……そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてるってことだと思う」

と語った。この言葉にはいろんなことを考えさせられた。一人では自分が存在してるとはわか

らない。他の誰かがいて、自分を認めてくれるからこそ自分がいま存在していると、生きているのだとわかるのだと気付かされた。

また、この物語では序盤に僕と桜良の住む県の隣県で通り魔事件が起こる。これは実は物語終盤への伏線となっている。桜良は彼女の寿命を全うすることはない。病院から退院したその日の午後、【????】くんとなっていた僕とデートに行くために住宅街を歩いているところをその通り魔に出刃包丁で刺し殺されてしまう。余命一年もないまだ高校生の彼女であっても、神様は平等に命を奪っていくのだ。

「すべての命は平等である」とは、病気で余命わずかの女子高生や、末期癌の人には命を全うさせてくれるということではない。どんな人であっても明日、もしかしたら数時間後死んでしまうかもしれないということである。それが

「すべての命は平等である」ということなのだ。よく考えてみれば当たり前のことなのに、そう思う人はあまり多くはないのではないだろうか。

最初は表紙の絵が気に入っただけで買った本だったが、この本を読んでからは、いつ大切な友だちが死ぬかもしれない、自分ですら数日後、数時間後には死んでしまうのかもしれないのだと思うようになり、自分の生きる時間、友だちとの時間をもっと大切に生きようと思った。

佳作

『少女』を読んで

都市・環境工学科 三年

日名子

唯

「私、親友の死体を見たことがあるの」

ある一人の転校生、紫織の一言から物語は始まった。

この本に出てくる主人公、由紀は小さい頃認知症の祖母を殺そうとした。それは未遂に終わったが、そのとき付けられた手の深い傷は全く消えず、その傷を見る度にトラウマとなった過去が頭をよぎる。由紀は、幼なじみで“親友”の敦子という少女と、いつも一緒にいる。敦子はクラスでいじめを受けていて、そんな敦子によって由紀は励まし支えている。

しかし、由紀が書いた一つの小説をきっかけに、二人はお互いに、親友とは何なのか、人間の命とは何なのか、自分とは何なのか、という今まで心の奥に隠されてきた疑問が現れ始める。その疑問と紫織の一言から、「人の死ぬところを見てみたい」という強い願望を二人はそれぞれに抱くようになる。

そしてその夏休み、由紀は重病の子ども達が入院する病院へ、敦子は老人ホームへとボランティアをしに通う。そこで希望を持った人達、

必死に生きようとしている人達を見て、そして実際に「死」という現象を身近に感じて、二人の心は次第に変化していく。「死んじゃえ」から「死んじゃダメ」「生きてほしい」に変わったのだ。夏休みが明け、由紀と敦子は本当の“親友”になれた。

普通ならここで「めでたし、めでたし」となるだろう。しかしこの物語は、ここまで私が説明してきたような、たったそれだけのものではないのだ。いろいろな人物、いろいろな場面、過去と現在とが最後の結末でどんどん交わり、繋がっていく。

残念ながら私は、その“繋がり”をうまく説明することができない。だから、この本を是非一度読んでみて欲しい。だんだん目に見えてくる世の中の“繋がり”に驚きながらも、物語に出てくる登場人物の言葉や心境に感動することだろう。

さて、この物語に出てくる言葉の中で私の頭の中から離れない、ある一言の言葉がある。

「世界は思っているより広い」

由紀が、小さい頃祖母を殺しかけ、手に深い傷を負い、心に闇がかかっているときに敦子が語りかけた言葉だ。この敦子の一言で由紀の心に光が差し、少しずつ笑顔を取り戻していった。

私も孤独感を感じ、自分の殻に閉じ込め、何もかもあきらめていたときがあった。自分の存在がどんなことに影響を与えているのかが知

りたくて、考えれば考えるほど自分の無力さを感じ、自分なんていなくてもいいのではないかとすら考えるようになった。目標もなく自分も友達も信じられず、笑顔も消えていった。

しかしそんなとき、「一カ月短期留学」という目標が生まれた。元々留学願望があったのだがもやもやとしたものだったので、留学の計画が鮮明になったとき、突然私の中に広がっていた闇が崩れ光が差し込んできた。一人だけで海外へ行ったのだが、留学中いろいろな経験をしました。その全てが自分にとって初めてで、素晴らしく、ぶっ飛んでいた。

この体験談が小説と何の関係があるのかと思うかも知れない。とにかく私が言いたいのは、留学をすることで「世界は思っているより広い」ことを感じる事ができた、ということだ。もちろん、アメリカやイギリスなどいろいろな国が存在する「世界」は広いということも感じた。だがそれだけではない。私自身の心の中にある世界も大きく広がったのだ。たくさんの貴重な経験をすることで、逞しくなっていく自分を感じた。今まで悩んでいたことも、コンプレックスに思っていたことも全て無かったかのようにどうでも良くなっていた。むしろ今では、自分自身の可能性に期待さえ抱いている。

ここで話を戻すことにする。この小説の一番と言っていいテーマは「因果応報」である。悪い行いをすればいつか必ず、それに対する

悪い報いを受けるという意味だ。たとえどんなに小さなことでも、悪いことをすればいつか自分に返ってくる。逆に言えば、良いことをすれば良い報いを受けるということだ。そのことを常に頭に入れ、自分が正しいと思うことを選択しながら、自分の人生を生きていきたい。



佳作 『心を整える。』を読んで

都市・環境工学科 三年

村上彩音

私は水泳をしている。二歳半から始めた水泳を十六年間続けてきた。小学生から、中学生の時までは正月もテスト期間も一度も練習を休んだことはなかった。あきやすい自分にしては、よく続けていると思うし、たくさんの試合や練習を経験してきたと思う。

しかし、水泳に対する意識は高いはずなのに、ここぞというときにプレッシャーに弱い。そのせいで、大事なレースの時に目標としていたタイムが出せず、何度も何度も悔しい思いをしてきた。このままではいつか水泳を嫌いになると思い、プレッシャーに強くなりたいと思った。『スポーツ脳を鍛える』『心を強くする方法』など、様々な本を読んでみたが、どれも客観的な見方をしており、実行にうつす気にはなれなかった。

そんな時、偶然読み始めた本が『心を整える。』だった。サッカー日本代表のキャプテンを務める長谷部誠選手が書いたものだった。

私は「整える」という言葉に驚いた。どの本にも「鍛えろ」や「強くなれ」など、自分の気

持ちを無理強いする事が書かれていた。だから私は、心とは鍛えるものと思っていた。私にとって「整える」という言葉は革命的だった。

この本は長谷部選手の日々の習慣について書かれたもので、全部で五百十六の項目がある。十章に分けられており、自分に合った項目を探しやすい。

この本の中で私がとても納得した項目が三つあった。

一つは、『運とは口説くもの』という項目だ。長谷部選手は「運がいい」とよく言われるそうだ。それはしつくりこない。運は何もせず待っているだけでは来ない。行動を起こさなければやって来ないものと長谷部選手は考えるからだ。だから良い結果が出なかった時も、「運が悪かった」とは思わない。運を味方につける努力が足りなかったと思うようにしているそうだ。

私はよく「コースに運がなかった」と思うときがある。でも結局は言い訳に過ぎず、自分の努力の不足分のツケが回ってきただけだった。長谷部選手の考えには納得できたし、自分が正しいとは限らないという謙虚な姿勢はキャプテンにふさわしいと思った。

二つ目は『マイナス発言は自分を後退させる』という項目だ。点を取られて「監督は自分の事をわかっていない」と、愚痴をこぼす選手がいるそうだ。愚痴を言った選手はストレス解消になる。しかし、愚痴を聞いた人は気分が悪

くなる。長谷部選手は自分が不快に思った事は他人にしない、思いやりのある人だ。

私は、この項目を読んでドキッとした。大会の後によく愚痴や暴言を言ってしまっからだ。スポーツマンシップに欠けることをしていると自分でもよくわかっている。でも思うようにタイムが出せなかったり、フォームの改善をしたら自分の中の焦りが大きくなるとつい口走ってしまう。この項目を読んでとても反省した。

三つ目は『決戦へのスイッチは直前に入れる』という項目だ。私にとって一番必要な事が書かれていた。

長谷部選手は昔、試合の二、三日前からイメージトレーニングをして気持ちを高めていくタイプだったそうだ。しかし、プレッシャーの大きい試合で、この方法を取り、大失敗してしまったそうだ。チームの仲間やコーチに忠告されても、身に染みついたやり方を変えるのはなかなか難しい。

長谷部選手が今しているのは、試合の十五分前しかイメージトレーニングをしないという集中の仕方だ。それは一発勝負の私に合った集中の仕方だ。何日も前から考えると段々不安になってしまうので、私は長谷部選手のやり方を取り入れることにした。

私はこの三つの項目を不安になった時に読み返すようにしている。

「毎日何かを続ける事は良いし」と長谷部選手

は言っている。日々の積み重ねが実を結ぶと言うことがよく分かる。

私が思う長谷部誠という人は「純粋で努力家の誰にでも誠実な人」だ。まさに名前通りの人だと思う。

長谷部選手がキャプテンを務められるのはそんな、人あたりの良さだと思う。人をまとめられる人は信頼される。彼はサッカー界に必要な人だと思う。

今でも水泳の大会があるたび怖くなる。何度も水泳から離れたいと思った。これからもそれは変わらないだろう。だからこそ、スポーツに誠実に向き合わなければならないとこの本を読んで思った。自分の駄目なところを受け入れ、その分は心でおぎなえるようになりたい。



佳作

脳を若々しく保つ

—「ほら、あれだよ、あれ」が
なくなる本 物忘れしない
脳の作り方』を読んで—

電気電子工学科 四年

平野音瑠

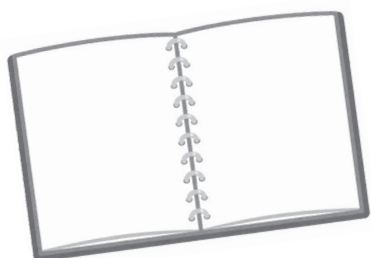
知っているはずなのに名前が出てこない、例えば、テレビで見たことのある有名人の名前であつたり、どこかで聞いたことのある曲の名前であつたり、そういった度忘れをしたことはありませんか。この度忘れ物忘れは年を重ねるごとに増えていってしまうそうです。年を重ねるごとに脳も老化していくためです。では、脳の老化は誰もがなってしまうかというところ、脳科学的に個人差が大きいがわかっているそうです。若々しい脳を保つためにはどうすれば良いのか、今回私が読んだ『「ほら、あれだよ、あれ」がなくなる本 物忘れしない脳の作り方』という本にそのことが書かれています。この本は、脳科学者である茂木健一郎さんとプロ棋士の羽生善治さんによる著書で、脳のアンチエイジングがテーマですが、学生である私たちにも十分参考になる所があると思えました。そもそも、なぜ度忘れしてしまうのでしょうか。

か。おでこのあたりに前頭前野という前頭葉で一番進化している部分があり、側頭連合野という記憶が貯えられているところから記憶を引き出します。この記憶を引き出す回路が使われなため、記憶力が衰えていくのです。思い出せないことがある時すぐにスマホで検索したりしていませんか。そんなことをしているとどんどん脳が衰えてしまいます。では記憶を引き出す回路を鍛えるにはどうしたら良いのでしょうか。それは、とても簡単なことです。記憶を引き出す回路を使えば良いのです。例えばお風呂に入っている時や登下校中などに、「昨日の夕飯はなんだったかな、一昨日は、その前は」と思い出してみたり、その日習った授業の内容を思い出してみたり、時々でいいのでやってみることで、これで十分記憶を引き出す回路を鍛えることができるのです。記憶を自在に引き出せることはとても重要なことだと思います。例えば試験のとき、この回路を鍛えていけば、一、二点は点数が上がるでしょう。また、難しい問題に直面しても「前にこんなふうにしたな」と思い出せば、乗り越えられることもあるのではないのでしょうか。この方法は私自身、ぜひやってみてほしいと思います。

では、脳を若々しく保つためにはどうしたら良いのでしょうか。それは「ドーパミン」という物質が秘密を担っています。脳の真ん中に中脳というところがあり、ドーパミンはそこから

前頭葉に放出されます。ドーパミンが放出されると脳は嬉しいのです。嬉しいだけでなく、前頭葉を活性化してくれます。ドーパミンをいかに前頭葉に与えるか、というのが脳の老化を予防するために、一番大事なことです。では、前頭葉にドーパミンを与えるにはどうしたらいいのでしょうか。ドーパミンは「サブライズ」の時に出ることがわかっています。最近サブライズはありましたか。意外なこと、感動すること、ビックリすることはありましたか。どのくらいドーパミンが出ているかは簡単なテストでわかります。時間の感覚です。一年が経つのが速いと感じている人は、ドーパミンが出ていません。どういうことかというところ、脳はサブライズを経験している時には、その時間を長く感じるという実験結果があります。つまり、一年が速く感じている人は、それだけサブライズがないということです。しかし、サブライズといっても、不安になるくらい初めてのことではないとドーパミンは出ません。ですが、不安になるくらい初めてのことに挑戦するのは難しいです。失敗したらどうしようと思えますし、とても勇気がいられます。そんな不安を乗り越えるためには、根拠のない自信を持つ良いのです。挑戦した結果失敗してもそこから学ぶものはあるし、成功したならドーパミンが出ます。挑戦することが大事で、そのために持つ自信に根拠など無くてもいいのです。

記憶を引き出す回路を鍛えたり、不安になるくらいの新しい挑戦をしてきたらどうか、と考えたとき、最近の自分は出来ていないことに気が付きました。幼いころは、失敗のリスクなどあまり考えず、どんどん新しいことに挑戦していました。大人になっていくにつれ「私には無理だ」「自分はそういうのじゃない」と挑戦することから逃げていました。しかし、それではダメなのだ、この本を読んで気がきました。この本の著者の一人である羽生さんは毎日が挑戦です。今日、負けるかもしれない、負けたらもう名人ではなくなってしまうかもしれない。そういうところで生きている人です。しかし、羽生さんはその挑戦を楽しんでいます。だからこそ、まだ脳を若々しく保っていられるのでしょう。挑戦することは脳にとつてもとても良いこと。それにはどうしても不安が伴いますが、少しずつでも新しいことに挑戦してみようかなと思いました。



編集後記

学生図書委員長
(機械工学科四年)

高橋雄文

先日、部屋の片づけをした際に私が高専三年生の時綴った日記を見つけました。その日何があったかどう感じたかなど無駄に細かいことまで記しており、その日々を鮮明に思い出しました。また過去の自分と会話をしているように思えました。読書感想文はある種、日記のようなものだと思います。どんな一日(本)だったのか、どんな所にいたのか、どんな話を聞いたのか、何を感じたか、最後にその一日(本)が自分をどう変えたのか。基本的に読書感想文は他人に読んでもらうためのものですが、日記感覚で綴ってみるのも一興ではないでしょうか。そしてそれを読み返した時に、本の中にいた自分を想起して、昔の自分と本を通じて楽しく話ができるはずです。

さて今回は前回よりも作品数が大幅に増えていました。これには驚きましたが、それだけ読書への関心が高まっているのだと個人的に捉えており、今後もどしどし感想文を投稿していただければと思います。種類としても小説以外に啓発本もあり、様々な感想を受け取ることができました。

私個人の審査基準としましては誤字脱字や言葉の誤用、文構造の誤りについては考慮せず内容や読み易さ、考えのわかりやすさ等に対して評価をしました。自分の考えを表現するということが想像以上に難しいのは、伝える側と受け取る側の二つの壁があるからです。うまく伝えることさえ難しい上に、受け取る側には捉え方というものがあるので、伝えるときにはこの壁をうまくクリアしなければいけません。ですが、皆さんはそれぞれの意見や考えをしっかりとめられていたのでとても読み易く、また興味深く読ませていただきました。

感想文をすべて読み終え、みなさんに書いてほしいことが見つかりました。それは本の設定を取り去ったときに残る、その本だけがもつ本質的な部分、つまり作者が何を伝えようと考えて本という形にしたのか、という考察です。自分が作者になったつもりでなぜこの本を書いたのか、どんな本質を示したいのか。ただ読むだけでは設定に紛れて本質がつかめません。どう感じたか、自分にどう影響を与えたかということも大切ですが、究極としてその本質は何なのかと考えると、より読書に面白みが出てくると思えます。

私自身としまして、図書委員長とは名ばかりであり本を読む方ではなく、感想文など尚のことではありますが、みなさんの感想文を読ませていただき、読書に今までに無いほどの興味

を持ってました。これを機に、多くの本に出会って
いこうと思います。いつかの日記のように一
か月でやめてしまわないよう頑張ります。

宣伝になりますが、作文以外の方法で自分の
考えを表現する場として図書委員会は読書会を
主催しています。気軽に参加していただけると
幸いです。ケーキが出ます！

最後になりましたが、校内読書感想文コン
クールを開催するためにご尽力いただきました
先生方、関係者の皆様、作品を投稿してくれた
学生の皆様、本当にありがとうございました。



平成28年度 読書感想文コンクール入選作品題材図書一覧

作品名	著者名	出版社
山月記	中島 敦 著	岩波書店／集英社 他
世界から猫が消えたなら	川村 元気 著	小学館
君の臍臓をたべたい	住野 よる 著	双葉社
おじいさんのランプ	新美 南吉 著	偕成社／小峰書店 他
いのちをいただく	内田 美智子 著 諸江 和美美 絵 佐藤 剛史 監修	西日本新聞社
カエルの楽園	百田 尚樹 著	新潮社
少女	湊 かなえ 著	双葉社／早川書房
心を整える。 —勝利をたぐり寄せるための56の習慣—	長谷部 誠 著	幻冬舎
「ほら、あれだよ、あれ」がなくなる本 物忘れしない脳の作り方	茂木 健一郎 著 羽生 善治	徳間書店

「もろく」 第四十三号

発行日 平成二十九年一月二十四日

発行者

大分県大分市牧一六六番地
大分工業高等学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

印刷所
住所

三和印刷出版株式会社
大分市高江西一丁目四三三―三
〇九七―五九六一七七〇〇